

# ダニエル書 - 第六十七番

預言的洞察：イスラム教、2001年9月11日、そして東風の日

Jeff Pippenger

2024-01-31

第三の災いのイスラムは2001年9月11日に預言的歴史に登場し、ただちに抑制された。その時、後の雨が降り始めたが、それは「量られて」いた。

節度をもって、それが芽を吹き出すとき、あなたはそれと論じるであろう。彼は東風の日、その荒ぶる風をとどめる。このことによってヤコブの不義は清められ、彼の罪を取り除くための実はすべてこれである。彼が祭壇のすべての石を、打ち砕かれて粉々になった石灰の石のようにするとき、林も像も立たない。しかし、堅固な町は荒れ果て、住まいは見捨てられ、荒野のように残される。そこでは子牛が草を食み、身を横たえ、その枝を食い尽くす。その枝が枯れると、折り取られ、女たちが来てそれらに火をつける。彼らは悟りのない民だからである。それゆえ、彼らを造った方は彼らをあわれまず、彼らを形づくった方は彼らに恵みを示さない。その日には、主が川の水路からエジプトの流れに至るまで打ち払い、イスラエルの子らよ、あなたがたは一人ひとり集められる。その日には、大いなるラッパが吹き鳴らされ、アッシリアの地で滅びに瀕していた者たちと、エジプトの地の追放された者たちが来て、エルサレムの聖なる山で主を礼拝する。イザヤ書 27:6-13

「東風の日」は、後の雨の到来を示すとともに、第三の災いに関わるイスラムも指し示している。またそれは、「ヤコブの不義が清められる」歴史の始まりをも画する。東風の日は2001年9月11日に到来し、その時点で生者の審判が開始した。生者の審判は第三天使の締めくくりの働きであり、そこにおいて十四万四千人の罪の除去が始まった。イザヤが「これによって」と書いたのは、そのことを意味している。

「これによって」に先立つ言葉は、「尺度をもって、それが芽を出すとき、あなたはそれと論じる。彼は東風の日、その荒々しい風をとどめる」である。「これによって」は、ヤコブとして表されている者たちから罪を取り除く、特定の試練となる真理を指し示している。それらの真理には、後の雨の到来を示す出来事（9/11）が含まれる。それらの真理には、後の雨を「一つのメッセージ」と定義すること、そしてその「メッセージ」がイスラムであることも含まれる。また、「東風」が第三の災いのイスラムであるという真理、そしてその後にはイスラムが抑制されるという預言的特質（stayeth）も含まれている。

試練そのものは、2001年9月11日に始まった「論争」によって表されている。第一の失望を象徴していたエレミヤは、神に「立ち帰れ」と勧められ、尊いものと卑しいものをより分けるよう教えられた。試練のメッセージの「実」は、二種類の礼拝者を生み出す。

愚かな者の裁きは、「彼が祭壇のすべての石を、打ち砕かれた白亜の石のようにするとき、木立と偶像は立ち残らない」として表されている。イザヤは、二十八章と二十九章で、物事をひっくり返す者たちに対する宣告に言及している。彼らは封じられた書を理解で

きない者たちである。悪しき者の業（実）は、陶器師の粘土と見なされるべきである。

それゆえ、見よ、わたしはこの民のうちに驚くべき業、すなわち不思議を行う。というのも、彼らの賢い者たちの知恵は滅び、思慮深い者たちの悟りは隠されるからである。主から自分たちの計りごとを深く隠そうとし、そのわざを暗やみに行い、「だれがわれわれを見ているのか。だれがわれわれを知っているのか」と言う者たちにわざわいがある。まことに、あなたがたが物事を逆さまにすることは、陶器師の粘土のように見なされるであろう。なぜなら、作られたものがそれを造った者に向かって「彼は私を造らなかった」と言えるだろうか。あるいは、形づくられたものがそれを形づくった者について「彼には理解がない」と言えるだろうか。イザヤ書 29:14-16。

悪しき者のわざは陶工の粘土のようになり、第二十七章では彼らのわざは、打ち砕かれる白亜の石として同様に描かれている。白亜や陶工の粘土は容易に粉末にされるが、「祭壇のすべての石を、打ち砕かれた白亜の石のようにする」こと、さらに「木立と像」を打ち壊して「立ち上がらない」ようにするわざの象徴は、ヨシヤ王の改革によって表されている。ヨシヤの改革によって象徴される最後のリバイバルと改革においては、「堅固な都は荒れすさび、住まいは見捨てられ、荒野のように残される」ゆえに、アドベンチスト教団の組織構造は荒廃する。彼らのすべてのわざ、すなわち世界中の何千もの教会、学校、短大、大学、病院、オフィスビルは、預言的に無価値な粉に打ち砕かれる。

会員もまた荒廃する。というのも、その「悟りのない民」は「枯れた枝」のように「折り取られ」「火にくべられる」からであり、「彼らを造られた方は彼らをあわれまず、彼らを形づくられた方は彼らに恵みを示されない」からである。

試練のメッセージによってもたらされる分離が完了すると、黙示録第十八章の第二の声が、バビロンから神のほかの羊たちを呼び出す。というのも、その日には、「大いなるラッパが吹き鳴らされ、アッシリアの地で滅びに瀕していた者たちと、エジプトの地で追放されていた者たちが来て、エルサレムの聖なる山で主を礼拝する」ということが成就するからである。

私たちが取り上げている箇所（イザヤ書27章8節から13節）は、2001年9月11日に始まった預言的な歴史を明らかにし、やがて神のほかの群れをバビロンから呼び出す人々の試練と清めを描いている。同じ章の冒頭の節々は、まさにその歴史の間に歌われるべき歌を示している。

その日には、彼女に向かって「赤いぶどう酒のぶどう園」と歌え。わたし、主はそれを守る。絶えずそれに水を注ぐ。だれにもそれを傷つけさせないために、昼も夜もそれを見張る。怒りはわたしの内にはない。誰が戦いにおいて、いばらやとげをわたしに向かって立てるだろうか。わたしはそれらに突き進み、ひとまとめに焼き尽くす。あるいは、彼がわたしの力にすぎって、わたしと和解するがよい。そうすれば、彼はわたしと和解するであろう。彼はヤコブから出る者たちを根づかせる。イスラエルは花を咲かせ、芽を出し、地の全面を實で満たす。彼を打った者たちを打ったのと同じように、彼は打たれたのか。あるいは、彼によって殺された者たちが殺されたのと同じように、彼は殺されたのか。イザヤ書 27:2-7。

ぶどう園の歌は、神の民を、神が愛し世話をしてくられたぶどう園として最初に示す歌である。次に、キリストの義にあずかろうと願う者はだれでも受け入れられるという約束を示す。さらに、二つの段階の雨によって表される聖霊の注ぎの約束を明らかにする。第一の雨は花やつぼみに命を吹き込み、第二の雨は大地を實で満たす。

ぶどう園の歌は、神がかつての選民を通り過ぎて新しい選民と契約を結ばれる時期を指し示す歌である。8節以降は、この章の冒頭の節の内容を繰り返し、さらに詳しく述べているにすぎない。この章の第1節は、8節で「東風の日」と呼ばれているのと同じ出来事を指し示している。

その日、主は、その苛烈にして大いなる力強い剣をもって、突き刺す蛇であるレビヤタンを罰し、曲がった蛇であるレビヤタンをも罰し、海にいる竜を殺す。イザヤ書 27:1

竜はサタンであるが、第二義的には異教ローマであった。

このように、竜は第一義的にはサタンを表しているが、第二義的には異教ローマの象徴である。『大争闘』439頁。

ダニエル書第7章および黙示録第12章における異教のローマの十王は、終末における黙示録第17章の十王を表している。

「王や支配者や総督らは、自らに反キリストの烙印を押し、聖徒-すなわち神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持つ者たち-と戦いを挑みに行く竜として表されている。」牧師たちへの証言、38。

イザヤ書27章1節は、竜に対する裁きの始まりを指し示しており、それは2001年9月11日、東風の日に始まった。地の王たちとそのグローバリストの商業パートナーに対する裁きは、「海」のただ中で「東風」によって地の金融構造が破壊されるときに成し遂げられる。

見よ、王たちは集まり、共に進んだ。彼らはそれを見ると、驚き、うろたえ、慌てて逃げ去った。そこで恐れが彼らをとらえ、産みの苦しみをする女のような痛みが彼らに臨んだ。あなたは東風でタルシシュの船を打ち砕く。詩篇 48:4-7

イザヤ書第27章1～7節の内容は、8～13節で繰り返され、さらに詳述されている。「東風の日」には、地の王たちと商人たちが恐れに直面し、その恐れはその時点から歴史を通じて増大していくことが示されている。その恐れは、2001年9月11日以来、地球の進歩主義的なグローバリストたちが、論理的に期待される以上に、より一層攻撃的に自らのアジェンダを押し進めてきた、非論理的で性急な動きに反映されている。サタンと、その代理者である地の商人や王たち（グローバリスト）は、竜の象徴として、自分たちの時が短いことを知っている。

それゆえ、天よ、またその中に住む者たちよ、喜べ。地と海に住む者たちには災いだ！悪魔は大いなる怒りをもってあなたがたのところに来て来た。自分の時が短いのを知っているからである。ヨハネの黙示録 12:12

東風の日——2001年の経済危機を引き起こし、グローバリストのメディアが何を主張しようとも悪化の一途をたどっているその日——は、竜が自分の時が短いことを知る時点で、世界が直面する問題である。彼はそのとき、全地の支配を目指す動きをさらに強めるが、それは「地と海に住む者たち」に「災い」（第三の災い）がもたらされるときに行われる。

第三のわざわい（東風）としてのイスラム教の到来は、2001年9月11日に経済的大惨事を引き起こし、グローバリストたちにこの地球に単一の世界政府を押し付けようとする取り組みを加速させることを余儀なくさせた。それでもイスラム教はその役割を果たし続けている。聖書の預言の象徴としてのイスラム教がもたらす、おそらく最も重大な啓示は、イスラム教への最初の言及に見いだされる。

主の御使いは彼女に言った。「見よ、あなたは身ごもっており、男の子を産む。その名をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞かれたからである。彼は荒々しい人となり、その手はすべての人に逆らい、すべての人の手も彼に逆らう。彼はすべての兄弟たちに向かい合って住むであろう。」創世記16:11、12。

神の御言葉は決して失敗しない。イスラム教が陣痛に苦しむ女のように痛みをもたらし続けるなかで、聖書の預言においてイスラムが特定されていることを受け入れる人でさえ、その二つの聖句にある明白な事実をまだ十分に理解していない。地球上のすべての人を共通の敵に対抗するために結集させるのがイスラムであると理解する人もいるだろうし、それはもちろん真実だ。だが、その聖句の最後の句こそ、より重大な真理である。世界は2001年9月11日に揺さぶられ、そして最近では今年の10月7日にハマスがイスラエルに対して行った攻撃によって再び揺さぶられた。しかし、戦いの霊と突如の破壊が、イシュマエルのすべての兄弟の「前に」あるのだということを、進んで認めようとする者はいない。

サウジアラビア、アラブ首長国連邦、カタール、クウェート、ブルネイ、バーレーンといったイスラム諸国によって奇襲攻撃が仕掛けられた場合、どのような破壊がもたらされるのか。イシュマエルの霊は「彼のすべての兄弟たち」にあり、これまでアフガニスタンやイラクのような国々で生じてきた「第三の災い」による戦争は、イシュマエルの預言が完全に成就するときには、まったく異なるものとなるだろう。パキスタンは核爆弾をいくつ保有しているのか？

第一と第二のイスラムの災いに示されているように、イスラムの戦争の予言的な特徴は、不意の奇襲攻撃である。裕福なイスラム諸国には、燃料を満載したジェット機、自動車爆弾、燃えるタイヤ、強姦やナイフよりも高度で、より致命的な兵器を秘密裏に確保または製造するのに十分な資金があるのだろうか。神の言葉は信じるべきか。

ミラーの夢のすべての宝石は、終わりの時代において信仰を試す真理となる。少なくとも、それらの真理が退けられ、預言はそれらが回復されると告げている、という現実において。しかし、それらの宝石の中には、天の聖所におけるキリストの働きや、第三の災いとしてのイスラムのように、まさに終わりの時にのみ成就する予言を指し示しているものもある。一つは至聖所におけるキリストの働きを表しており、これは確かに現在の信仰を試す真理である。もう一つは真夜中の叫びのメッセージを示しており、これもまた現

在の信仰を試す真理である。

ミラー派の運動と、そこからさらに十四万四千の運動を導入する1989年の「終わりの時」とを織り合わせる糸は「七つの時」であり、それはミラーの最初の宝石で、アドベント主義が古き道を離れたときに最初に退けられたものである。1863年の反逆から1989年の「終わりの時」までの126年は、「七つの時」を表している。二千五百二十は千二百六十という二つの期間に分けられており、また千二百六十の十分の一、すなわち十分の一は百二十六である。家を建てる者たちが捨てた石は長大で、三天使の最初と最後の運動を結び付ける。こうして、「七つの時」の真理は現代の試しの真理でもあり、それはもはや単なる礎石ではなく、隅のかしら石となる真理であることが示される。

ここで、ダニエル書のウーライ川の幻に表されているミラー派運動における知識の増大の考察をいったん終え、今度は、十四万四千人の運動における知識の増大を表すヒッデケル川の幻に注意を向けることにする。

次に、1863年から1989年までの126年間にわたるアドベンチズムの四世代を検討することから始めます。

次回の記事でその研究を始めます。

第六年の第六の月の五日、私が家に座しており、ユダの長老たちが私の前に座していたとき、その所で主なる神の御手が私に臨んだ。私は見た。見よ、火のような姿があった。腰からは火のようで、腰からは輝きのよう、琥珀の色のようであった。彼は手の形を差し伸べ、私の頭の髪の毛をつかんだ。すると御霊が私を地と天との間に持ち上げ、神の幻のうちに私をエルサレムへ連れて行き、北に向く内側の門の入口へと連れて来た。そこには、妬みを引き起こす妬みの像の座があった。見よ、私が平地で見た幻のとおり、イスラエルの神の栄光がそこにあった。彼は私に言った。「人の子よ、今、北の方に目を上げよ。」そこで私は北の方に目を上げた。すると、北の方、祭壇の門の入口に、この妬みの像があった。さらに彼は私に言った。「人の子よ、彼らが何をしているか見えるか。イスラエルの家がここでやっている大いなる忌むべきことを——それゆえ、わたしがわが聖所から遠ざからねばならないほどのことを。しかし、なおもう一度向きを変えよ。さらに大いなる忌むべきことを見るだろう。」そして彼は私を庭の入口に連れて行った。私が見ると、壁に穴があった。

そして彼は私に言った、「人の子よ、今、壁に穴を掘れ。」私が壁に穴を掘ると、見よ、戸があった。彼は私に言った、「中に入り、彼らがここでしている邪悪な忌むべきことを見よ。」それで私は中に入って見た。すると、見よ、あらゆる這うものの形、忌むべき獣、そしてイスラエルの家のすべての偶像が、周囲の壁一面に描かれていた。その前には、イスラエルの家の長老七十人が立っており、その中ほどにはシャファンの子ヤアザニヤが立っていて、皆、それぞれ手に香炉を持ち、濃い香の煙が立ち上っていた。すると彼は私に言った、「人の子よ、イスラエルの家の長老たちが暗闇の中で、各々自分の像の部屋で何をしているか、あなたは見たか。彼らは、『主は私たちを見ておられない。主は地を見捨てられた』と言っているのだ。」彼はまた私に言った、「もう一度向きを変えよ。彼らが行っている、さらに大いなる忌むべきことを見るであろう。」それから彼は私を、北に向いた主の家の門の入口に連れて行った。見ると、そこにはタムズのために泣いている女たちが座っていた。すると彼は私に言った

、「人の子よ、これを見たか. さらに向きを変えよ. これらよりも、なお一層の忌むべきことを見るであろう。」そして彼は私を主の家の内庭に連れて入った. 見よ、主の宮の戸口、玄関と祭壇の間に、約二十五人がいて、彼らは背を主の宮に向け、顔を東に向け、東の方の太陽を拝んでいた. すると彼は私に言った、「人の子よ、これを見たか. ユダの家にとって、彼らがここで行っているこれらの忌むべきことは軽いことだということか. 彼らはこの地を暴虐で満たし、戻ってきて、私を怒らせることをしている. 見よ、彼らは鼻に枝を当てている. だから、わたしも憤りをもって対する. わたしの目は容赦せず、憐れみもしない. たとい彼らが大声でわたしの耳に叫んでも、わたしは彼らを聞かない。」エゼキエル書 8:1-18.